

不可欠であることを強調されたことも、銘記すべき点であろう。なお討論の経緯についてもふれるべきであろうが、それは以下の提題者の報告に十分反映されていると考えられるので、紙幅の関係もあり省略する。

## 提 題      オリゲネスとアウグスチヌスにおける声

加 藤 武

### 序

われわれはここで次のふたつのテキストを比較し、声とはなにかを問う。

- (1) オリゲネスの『ヨハネによる福音講解』VI, xvii, 94~102: xx, 108~111. (以下Jと略記)
- (2) アウグスチヌスの『説教』288, 3-5 (以下Sと略記)

アウグスチヌスがはたして、直接にオリゲネスのこのテキストを読んだかどうか、それをここで問うのではない。これまでいかにも、アウグスチヌスがプロチノス、ポルピュリオスと比較されることは多くあった。しかしフィロンからオリゲネスを経てアウグスチヌスに及ぶ思想的な系譜については、顧みられることが極めて乏しかった<sup>1)</sup>。これでよいか。顧みる余地があるであろう。

### 1 オリゲネスの場合

オリゲネスはヨハネによる福音書1章23節の、「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。主の道を真っ直にせよ、と」における声とはなにかについて述べている。

「神の子が厳密に言ってロゴスを用いられるホ・ロゴスにはかならないように……ヨハネもロゴスを明らかにするために、フォーネーを用いたのです」<sup>2)</sup>。(以下小高毅訳による。)

これはオリゲネスの声に関する基本的な見解を示す。この点で、ヘラクレオンと根本的に異なる。ヘラクレオンはロゴスとしての救い主と、その解釈者としてのヨハネとは、次元を全く異にする、と見る。ヘラクレオンは言う。

「言葉（ロゴス）は救い主である。荒れ野に響く声（フォーネー）はヨハネによって知らされるものである。預言者の団体とは皆、騒音（エーコス）である」<sup>3)</sup>。  
ヘラクレオンにとってロゴスと、フォーネーとエーコスは三層をなしており、それぞれの間には深淵が横たわる。そこにかかる橋はない。

オリゲネスはこれを却けて言う。

「預言者の声も騒音に他ならないのであれば、どうして救い主は〔次のような言葉で〕わたしたちを〔預言者の声〕に向けるのでしょうか」<sup>4)</sup>。

預言者が述べることはキリストについてのあかしである。それは意味を持っている。だから、それはたんなる騒音ではない。声はどこまでも、有意味的であり、理解可能でなければならない。オリゲネスにおいて、声は、ロゴスを指示するものとして、積極的な役目を持っている。

もとよりロゴスと声は同一ではない。この点について、第二巻で言う。

「わたしの考えでは、なんの意味内容もなく、言葉と関係なしに、声が発せられることがあり、同じように、自らのうちで考えをめぐらす時のように、声を用いず、ことばがニュースに伝えられることがあるのですから、わたしのうちにおいて声とロゴスは別のもです」<sup>5)</sup>。

オリゲネスは、ロゴスと声との質的な差異についての明瞭な認識をあくまで前提とした上で、ロゴスと声の間に橋を掛けた。

さらに、天使ガブリエルは、祭司ザカリアに対し、かれの老妻エリサベツが男の子を生み、その名をヨハネと言う、と告げたとき、これを一笑に付し信じなかった。このために、罰として声が出なくなったというエピソードを引いて言う。

「それは声の誕生を信じないことのために、他の何の罰も負わされなかったことは全くふさわしいことです」<sup>6)</sup>。

その名はヨハネと書いた時、声を回復した。これを一種の失語症と見るとき、興味深い。逆に、声の回復とは、意味充実であり、ロゴスを示すことに他ならないことを、よく示している。

ついで、ヨハネは、荒れ野に叫ぶ者、と呼ばれている。それでは大声で叫ばなければならないのか。そうではない。大声で叫ぼうと、声を出さないで祈ろうと、もしも、それが、観知的な声で語られるなら、本質において変わりはない、と説く。

「精神によって知覚される、祈るひとびとの声は大きいというにはほど遠く、遠

く迄届くものではないとしても、……神はこのように祈る人々（の声）を聞かれます」<sup>7)</sup>。

声はオリゲネスにおいて、単なる音声とは異なり、意味性を帯びていることが明らかである。従って、声を形相的なもの、と見做すことができる。だから、声を心理化したり、物質的な音響とのみ見做すひとには、声の意味は捉えがたいものになるであろう。

オリゲネスのこれまでの所論の筋道を要約すれば、次の点に帰する。

- (1) ヨハネはロゴスを伝えるためにフォナーを用いた。
- (2) 声とは何か。それは観知的なものである。だから理解可能なものである。
- (3) しかるに、ヘラクレオンはロゴスと声と騒音の間の相互関連性を捉えていない。

## 2 アウグスチヌスの場合

それではアウグスチヌスはどうか。Sの検討に入ろう。

S2の末尾において、「ヨハネは声、キリストはことば」<sup>8)</sup>と簡潔に定義している。

しかし、S3において、ヨハネとキリストという神学的な視点にいきなり入ることを避け、言語学を踏まえながら、言語哲学的な視点から接近を試みる。これは若き日に、文法学と修辞学を学び、やがて、修辞学教授であったことを思えば、むしろ当然と言える。

「それでは、声とことばと、どのように違うのか、それを調べて見ましょう。注意を凝らして吟味しましょう。これはささいな問題ではないのです。それどころか、よほどの注意を傾ける必要があります」<sup>9)</sup>。

声の問題はアウグスチヌスにおいて、いかなる位置を占めるのであろうか。それは、周辺的な問題でしかないのであろうか。そうではない。これからとりあげる問題の重大性を聴衆に訴えるかれの急迫した語調、緊迫した文体にわれわれも留意すべきである。

「さてここに二つのことがあります。それは声とことばです。声とはなんでしょう。ことばとはいったいなんでしょう……ことばは、もしもそれがなにか指し示すためでなかったとしたら、そんなものはことばとは言えませんね。ところが、声がなんらか音響を發し、いわば、話すひとの音声でなく、叫ぶひとの音声で、非理性的に音を出したとしたらたとえ声 (vox) とは言えるとしてもことば (verbum) とは言えません。だれかが泣き声を出したとします。それは声と言え

るでしょう。それはなにかしら、かたちなき音声 (*informis quidam vox*) なのです」<sup>10</sup>。

このように見るとき、*vox* は *sonus* となんら相違を持たない。*vox* は意味を持たない。これに対して、*verbum* は有意味的である。ここで声を '*informis quidam vox*' と呼んでいることは注目に値する。意味とはかたちをもつこと、が暗示されているからである。

アウグスチヌスはすでに『弁証論』において、命題文 (*sententia*) には多大の関心を寄せたが、音声 (*vox*) には当時の文法学者に比べてあまり関心を寄せていない。かれの関心は一貫して判断の根拠を問うことにあったからである。

続いて言う。

「すでに声とことばの相違について着目したのだから、今度はヨハネとイエスと、このふたりについてみなさんが驚いておられることに耳を傾けましょう」<sup>11</sup>。

ここで舞台が転換する。その転換の軸となるのは、ふたたびヨハネとイエスの関係である。

ここで直ちに神学的な考察に入る訳ではない。しかし、思索の過程一般を観察の対象としつつ、その背後でふたりの関係を考えている。神学的な思索と哲学的な思索が同時に対位的に進行する。

「ことばは声なしで、十分に意味があります。けれども、声はことばを伴わなければ、無意味です」<sup>12</sup>。

声とはなにか、については一応の検討を終えた。今や、ことばとはなにか、に迫ろうとする。

「さて、あなたが、なにかあることを言おうと思ったとしましょう。あなたが言おうとされたことは、こころのなかに抱かれています。それは記憶に貯えられ、意志によって迎えられ、知性のなかで生き生きと活動しています」<sup>13</sup>。

これはだれしも経験することであろう。ある着想が浮かぶ。けれどもそれは、まだ、くらげのように、漂っている。なにかしら混沌とした塊りがある。次第にそれぞれが秩序づけられ、やがて、音声を伴う言語にまで翻訳される。

アウグスチヌスはあきらかにこの思想の誕生の瞬間、分節化された言語になる生成の瞬間を捉えようとしている。

「それに、あなたが言おうとされたことはなにかある国語に属するものではありません

ません。ここに生まれたレスは、ある種の言語、ギリシャ語にも、ラテン語にも、フェニキア語にも、ヘブル語にも、その他どの国語に属しません」<sup>14)</sup>。

われわれはここで、ロゴス・エンディアテトスとロゴス・プロフェリコスの、ストア派による古典的な区別を想起することもできるし、チョムスキーの表層言語と深層言語の生成文法理論を思い起こすこともできよう。

それはアリストテレスの『命題論』(1章)におけるたましいのうちに求められることばと直ちに同じではないであろう。ましてトマス・アクィナスへと展開する方向でのみ捉えられるであろうか。

このところに捉えられた思想を、アウグスチヌスは、

—res quaedam

—sententia quaedam

—ratio corde concepta

などと表現している。

これについて彼は以下のような具体例をあげて説明している。

「そうですね、例えば、神 (deus) という言葉を思い浮かべることにはましよう。

ここに浮かんだこの神は偉大ななにかです。たしかに神は de-us というふたつの音節ではありません。というのは、神はこのふたつの音節ではないからです」<sup>15)</sup>。

これは興味深い指摘である。混沌としているけれども、思想の雲海にはなにか核がある。それはひとつの単語である。(ジルソン)

ここに浮かんだこの思想を他者にむかって表現しようと試みる。

「神を語ろうと思います。わたしは、これから話そうと思うひとに注意を向けます。それはラテン語でしょうか。なるほど、deus と言います。それはギリシャ語でしょうか。いかにも theos と言います。deus と theos の間では音声は異って聞こえます。両者では綴りも違うのです。でも、思っているわたしのこのころのなかでは、思い浮かべていることがらにおいて、綴りのいかなる違いもありません。それはそのまま (hoc est quod sunt : 自己同一) です」<sup>16)</sup>。

想念の段階では自己同一のものが、音声と音綴の差異性によって分節化される。

では、このコミュニケーションの場で、なにが起きたのであろうか。

「いったいほかのひとに話すことによって、言おうと思ったことがらを、わたしは失うのでしょうか。あなたとわたしの間に入って、付け加えられた音声は、あ

あなたにむかってなにかを生み付けました。しかしわたしから離れて、思想がそちらに移り住んだという訳ではありません」<sup>17)</sup>。

ここに、伝達者と被伝達者の間における同一の思想の共有が、見事に表現されている。しかしまさにこの伝達の過程において、声が役割を果たす。

「いわばこころの中軸において (in cardine cordis mei)、いわば精神の秘所において (in secreto meo)」貯えられた想念が外に出てゆくために、まさに、「声の任務」(ministerium vocis) が必要になる。

\*

S4 において、アウグスチヌスはコミュニケーションの場面における二方向の回路を辿る。

「だから、ことばはわたしの声よりも前にありました。わたしのなかでことばが先に行き、声があとからついてきます。でもあなたが理解できるためには、まず声があなたのもとに届き、ことばがあなたに囁きます。わたしのなかでことばよりも前にあったことは、まずあなたのなかで、あなたの耳に聞こえてからでなければ、それを知ることはできないのです」<sup>18)</sup>。

- (1) 想念から声へ。これが伝達者から被伝達者への、伝達の回路である。
- (2) 声から想念へ。これが被伝達者の側での受信の回路である。

ここで、これまで言語哲学的な考察の背後に見え隠れしていた神学的な考察が前面に現れる。

「だから、もしも声がヨハネなら、ことばはキリストです。とすると、キリストはヨハネよりも前におられたのです」<sup>19)</sup>。

たしかにアウグスチヌスは言語哲学を基盤としている。けれども、テキスト(聖書)を読む場面で、むしろより創造的な思索を生みだした。ストア派、新プラトン派を踏まえた言語哲学的な反省と、テキストを読むという解釈学的な行為、このふたつの異なる位相が相互に交差する地帯でその独創的な思索が形成されていったのである。

アウグスチヌスはここで、声を一段と励まして言う。

「兄弟たちみなさま、これは大いなる秘義であります。どうぞ、ことがらの大きさをじっくりと味わって下さい」<sup>20)</sup>。

われわれは声について思索を凝らすことが乏しいように思われる。J・デリダの、西歐的なフォノロジスムへの告発もこれに拍車を掛けたのかもしれない。ロゴスの帝国

主義はいぜんとして君臨しているように見える！ われわれはアウグスチヌスの聴衆とともに、時の隔たりを超えて、声について思索しなければならない。

さて、これまでの長い基礎的な、ある意味での予備的な考察を踏まえて、いよいよ、声の聖域に接近し、声の復権に挑戦する。

「この秘義において、ヨハネは声の役割を演じていました。(Personam gerebat Johannes vocis in sacramento) というのは、かれだけが声であったのではないからです。というのはひとはすべて、ことばを伝える者 (Annuntiator Verbi)、神の声 (vox Dei) だからです」<sup>21)</sup>。

ことばとはなにか。それは、「甬めにことばがあった。ことばは神とともにあり、ことばは神であった」と言われる、あのことばなのである。

(ここでは神のことばと、うちなることばをことば、音声化したことばを言語、言葉と呼ぶことにする)。

「こころの中に抱かれたことばが、なんとという大いなる言葉 (verba) 呑むしろ声 (voces) を造ることでしょうか」<sup>22)</sup>。

むしろ声 (voces)、と言い替えられた点に細心の注意を払おう。ここで声とは、宣教者、すなわち、父祖、預言者、おびたしい神のことばの伝達者をさしている。

それではいったいなぜ、そっと verba から voces へと置き替えられたのであろうか。

「かれはみことばに留まりつつ、多くの声を送りました。そして多くの声を送った後で、ことば自身を、いわばその乗り物であるその声、その肉に乗せて送ったのです」<sup>23)</sup>。

声は乗り物 (vehiculum) である。これは S8 でわれわれが見た声の定義と異なっている。そこでは、声 (vox = sonus) それ自体は意味を担ってはいなかった。声でなく、言葉 (verba) が意味を担っていた。しかるに今や、音声という媒体それ自体が意味を積極的に担う。

ここで、一挙にかれの思索は頂きの高みに到達する。

「だから、ことばに先立つすべての声を集めなさい。すべてのことばを、ヨハネのペルソナに向けて置きなさい (constitue)。こうしたすべてのことばの秘義 (mysterium) をヨハネは担っていました。このすべての聖なる、神秘に満ちたペルソナのゆえに、かれは独一でした。それゆえ、かれは本来の意味で (proprie)

声と呼ばれたのです。いわば、かれはすべての声の徴表 (signaculum) にして、秘義であられるからです<sup>21)</sup>。

persona という語が役割という意味から、その存在そのものへと移行している。今や単に乗り物として、乗り手と乗馬と区別することはできない。乗り手は馬から降りることができない。人馬一体となっている！ ひととは仮面をかぶって演技する。しかしいつの間にか、仮面が顔にくっついてしまった。それは剥ぎ取ることができない<sup>25)</sup>。声はペルソナとして肉化している。

すべてのことばをヨハネに向かって凝集せよ、と言う。声は比喩であろうか。そうではない。それは本来的に (proprie) 言われている。

ここまで、声の消極的、否定的な意義から出発し、やがて、積極的、肯定的な意義へと進んできた。今やここで、もう一度転換する。

\*

この第三の局面を開くのは、S5 で述べられる次の文である。

「カレハ盛シニナリ、ワレハ衰ウベシと言われているとき、それが、なんについて言われているかに注意して下さい」<sup>26)</sup>。

言語を絶し、思索をほとんど拒絶するかに見える事態を前にして、きわめて慎重に、思索の課題へと聴衆を誘導する。

「いいですか。もしわたしに可能なものなら、明瞭に語りたい。でも可能でなければ、暗示に訴えましょう。それしもかなわないのであれば、かの声自身、ヨハネの声自身がわたしが述べた声とことばの区別によれば、いかにして、なんのために、どういう意図から、カレハ盛シニナリ、ワレハ衰ウベシと語ったのかを、せめて、考えてみることにしましょう」<sup>27)</sup>。

アウグスチヌスの思索は高頂に到達する。思わず賛嘆が漏れる。

「おお、おどろくべき秘義よ！」<sup>28)</sup>

すべての声のもろもろの秘義がこのペルソナにこめられているからである。

なぜワレハ衰エ、カレハ盛シニナルのか。完全なるものが来るからである。ではその完全なるものとはなにか。

それは神のもとにある神のことばに他ならない。

「かれは神のもとにあったが、神と等しくあることに固執しようと思わず」というピリピ2章6節を引く。やがて終末の日に、この完全なるものがやってくる。しかし、



今はその時でない。

「かれはその肉を示されます。奴隷たちに示されます。しかしそれも奴隷のかたち (forma servi) をです」<sup>29)</sup>。

われわれはここで『キリスト教の教え』I, 13, 12のなかでわずかに声の問題に言及した「声のかたちをとり」という一節を想起する。しかしそこで‘声のかたち’(forma vocis) という表現は神のことばでなく、人間のことばについて言われている。しかしそこでも、神のことばと人のことばとのアナログアに基づいて言われていることは確かである。

ようやく結論に近づき、要約して言う。

「神に等しいみ子が僕のかたちをして、僕たちに語っていたのです」<sup>30)</sup>。

しかしフィリポはそのような僕のかたちに飽き足らず、父なる神自身を示すように、執拗に迫った。けれどもイエスはこれを厳しく戒めて言う。

「フィリポよ、わたしを見るものは、父をも見ているのである」<sup>31)</sup>。

キリストは肉あるいは僕のかたち、ヨハネは声のかたちなのである。

「だから、ヨハネはすべての声のペルソナ、キリストはことばのペルソナ」<sup>32)</sup>

と言われる。ここで、ペルソナの意味が三転して、かたちの意味を帯びていることに気づく。すなわち、役割から、存在性へ、さらに存在性からかたちへと、三転している。第一段から第二段へ、第二段から第三段へと上昇する。それは弁証法的な論理的展開である。それはだから高次の止揚であって前の段階の廃棄ではない。

預言者の声、使徒書簡の声、詩篇の声、福音書の声、それらは、今は必要である。

「しかし、やがてわれわれが(彼を)ありのままに見るとき、そこでいったい福音書が読まれるでしょうか。預言書が聞かれるでしょうか」<sup>33)</sup>。

声がいつの間にかテキストの声に変わっていることに、目を向けたい。テキストの声、それは、実際に読まれるにせよ、朗読されるにせよ、本質的には、書かれた声にはかならない。しかもこのような声は衰えることにその使命がある。声は消えてゆかなければならない。それが声の不思議な運命である。

われわれは声の積極的な意味を探ってきた。しかしそれは、実は、否定性を秘めた肯定性として捉えなければならないものであった。

## 結 論

オリゲネスとアウグスチヌスの声についての思想を、ふたつのテキストを比較することによって、次の結論を得た。

- (1) 声を音声と同一レベルで見るとき、声は意味性を持たない。
- (2) より高次のレベルにおいて、声は意味を持つ。

以上の2点においては、オリゲネスとアウグスチヌスは驚くほど一致している。

けれどもうちなることばが分節的な言語として、現象する場面において、アウグスチヌスはオリゲネスを超える。

それではアウグスチヌスはどの点において、オリゲネスを超えるのか。

声はかの光へと超越するのではない。それは光から下降する。それを *praesentia* の方向にあると見做してよい。それは *transcendentia* の方向には求められない。

ヨハネは声としての使命を果たしたとき、衰えた。それはイエスが見えてきたときである。見よ、このひと、と指差したとき、その使命を終えた。声は否定性において肯定的な意味を見いだす。

これを要約しよう。

- (1) 声は下降性を持つ。
- (2) 声は否定性において、肯定的な意味を持つ。

この2点においてアウグスチヌスはオリゲネスを超える。

われわれは声とはなにか、を問うた。それでは声はどこで現象するか、それを次に問わねばならない。『告白』における声の現象の場において、それを探りたい。しかしそれは今回の報告の範囲を超える<sup>34)</sup>。

## 註

- 1) アルターナーは、ルフィヌスとヒエロニムスによるラテン訳を使用したと見る(1951年)見解を発表した。1954年の国際学会では冷笑な見方があった。最近、チャドウィックは(1985年)オリゲネスの思想のアウグスチヌスへの直接的な影響を、積極的に認めようとする。Henry Chadwick, *Christian Platonism in Origen and Augustine*, *Origeniana Tertia*, Roma, 217-230。しかし文献学的な意味で直接的な影響を探ることに目下筆者の関心はない。さらにフィロンにまで遡らなければならない。特に Her. 67 他を参照。
- 2) Origène, *Commentaire sur Saint Jean*: SC, VI, xvii, 10。以下 J, 6, 17, 12

## と略記.

- 3) J, 6, 20, 108.
- 4) J, 6, 20, 109.
- 5) J, 2, 32, 26.
- 6) J, 6, 17, 97.
- 7) J, 6, 18, 101.
- 8) S2, Vox Johannes, Verbum Christus. 以下 Migne 版, 1696 C.
- 9) S 2. 1696 C.
- 10) S 2. 1696 D.
- 11) S 3. 1697 A.
- 12) S 3. 1697 A.
- 13) S 3. 1697 B.
- 14) S 3. 1697 B.
- 15) S 3. 1697 B.
- 16) S 3. 1697 D-1698 A.
- 17) S 3. 1698 B. propagavit~emigravit.
- 18) S 3. 1698 D.
- 19) S 4. 1698 D.
- 20) S 4. 1698 D-1699 A.
- 21) S 4. 1699 A.
- 22) S 4. 1699 B.
- 23) S 4. 1699 B.
- 24) S 4. 1699 B.
- 25) アウグスチヌスにおける persona の用語法については, Hubertus R. Drobner, *Person-Exegese und Christologie bei Augustinus-zur Herkunft der Formel <una persona>*, 1986, Leiden の古典学的・文献学的研究によって教えられた. p. 146-7. かれは, personam gerere, gestare の用語をキケロに負いつつ根本的に変更した.
- 26) S 5. 1699 C.
- 27) S 5. 1699 C.
- 28) S 5. 1699 C.
- 29) S 5. 1699 D-1700 A.
- 30) S 5. 1700 A-B.
- 31) S 5. 1700 C.
- 32) S 5. 1700 D. Ergo omnium vocum persona Johannes, Verbi persona Christus.
- 33) S 5. 1701 A.

- 34) 脱稿直後, Reinhardt Herzog, *Non in sua voce-Augustins Gespräch mit Gott in den Confessiones*, Poetik und Hermeneutik XI, Das Gespräch, 1984, München, 213-250 が届いた。視点の相違はあるものの、この論文の所在を教示いただいた G. Madec 教授に感謝申し上げる。声はどこで、いつ現象するかを考察する際に、詳しく検討したい。

## 提 題 『三位一体論』におけることば論

中 川 純 男

### 1

imago dei であるわれわれの精神に御言の類似を探求するアウグスティヌスは、『三位一体論』第十五巻で次のように言っている。

「音声となる以前のことば、さらに、音声の類似として思いめぐらされる以前のことばを捉えることができるなら、このことばはいずれの言語でもないことば、すなわち諸国語と呼ばれ、われわれの場合はラテン語であるような言語のいずれでもないことばであるから、この鏡を通しこの謎においてではあるが、かのことば、『はじめにことばがあった。ことばは神のもとにあった。ことばは神であった』と言われていることばを見ることがすでにできるのである」<sup>1)</sup>。

音声として響くことば *verbum prolativum* が語られる以前にわれわれの精神の内でも語られることば、しかも、声を発するに先立ち音節をたどって考えられることば *verbum cogitativum in similitudine soni* よりさらに以前に語られることば、このことばこそ、アウグスティヌスによれば、われわれにおける御言の類似としてのことばに他ならない。このようなことばを精神の目で捉えることができるなら、そのときわれわれは御言を、この鏡を通しこの謎においてではあるが、すなわちわれわれの精神における類似としてではあるが、見ているのである。この御言の類似としてのことばを、われわれにおけるすぐれた意味でのことばであると考え<sup>2)</sup>、書かれたことば、話されることばに先立つ根源的なことばであると思ふことが、ことばについてのどの